

## カンボジアの「高校における日本語教育」に関する意識調査

## —第二外国語としての導入に向けて—

ハン・マカラー（東京学芸大学大学院 院生）

## 1. 研究背景と目的

カンボジアの中等外国語教育は、2004年のカリキュラム改訂で、英語またはフランス語が選択必修科目として位置付けられ、外国語でのコミュニケーション能力を養成することが目的となっている。また、将来後期中等教育において第二外国語として日本語教育を導入することが検討されている。発表者はそのカリキュラムの検討を進めているが、そのためには高校生の日本語学習の動機や、興味や関心のある内容、その度合いを把握する必要がある。そこで、カンボジア人の高校生と日本語学習経験のある大学生にアンケート調査を実施した。その結果を元にカンボジアの高校生に合ったシラバスやカリキュラムをデザインしたい。

## 2. 研究方法

日本国内では、教育課程の編成においては、児童生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補充的な学習や発展的な学習等の導入が進んでいる（田中 2011）。カンボジアの日本語教育においても、生徒の実態や関心に合わせたカリキュラム編成をしたいと考える。そこで本調査では大学生108名と高校生192名を対象にクメール語で日本語学習のニーズ等の調査を行った。大学生は日本語を学習中であり、その68%は大学入学前にも学習経験をもつ。高校生の98%は日本語学習経験がない。アンケートの質問項目は、主に日本・日本語に対する知識やイメージ、学習の目的・ニーズ、学習内容に対する要望、身近に感じる話題等に関するものである。

## 3. 結果と考察

## 3.1 日本人・日本語の印象について

大学生の持つ日本人のイメージは、「細かい」(84.26%)、「約束を厳守する」(80.56%)、「勤勉である」(70.37%)の順に多かった。大学生は日本人の内面に関するイメージを持っていることがわかる。高校生は「礼儀正しい」(36.46%)、「勤勉である」(30.21%)、「細かい」(29.69%)の順に多かった。高校生には突出して多い項目がないのに対し、大学生には50%を超える項目が5項目あり、学習の経験によって日本人に対する印象が明確になると見られる。

日本語に関して、大学生には「漢字が難しい」(82.41%)、「助詞が難しい」(68.52%)が多かった。母語に漢字や助詞を持たないカンボジア人はそれらの学習は困難だという印象をもつと言えるだろう。一方、高校生は、最も高い「まったくイメージがない」でも32.81%であり、その他の選択項目は30%を超えていない。日本語に対して特定のイメージを持っていないと考えられる。

## 3.2 日本への興味・関心について

大学生の興味・関心は選択者が50%を超えた項目が4つあり、「日本語」(70.37%)、「料理」(66.67%)、「日本製品」(60.19%)、「働き方」(57.41%)の順に高かった。国際交流基金(2012)の調査で他の国の学習者の多くが関心を示していた「ゲーム」「マンガ」「J-POP」は低かった。高校生では選択者が50%未満の項目が多く、上位3位は「日本製品」(56.25%)、「料理」(52.08%)、「アニメ・漫画」(47.40%)であった。日本語学習未経験であることが影響し、日本文化を象徴

するような、技術・伝統文化・ポップカルチャーへ関心が向けられているものと思われる。

大学生を大学入学以前の学習経験の有無別に分け、高校生も含めた3者で比較した。その結果、大学生は学習経験に関わりなく「日本語」「働き方」に強い関心を示している。一方で、「日本人の性格」「伝統文化」「生活スタイル」は、学習経験を通して関心が徐々に高くなる傾向がある。

### 3.3 日本語学習の目的について

大学生は「日本への留学」(86.11%)、「将来の就職」(68.52%)、「日本語そのものへの興味」(50.00%)の順であった。高校生もほぼ同様で「日本への留学」(52.08%)、「将来の就職」(48.96%)となった。つまり、将来の進路として日本に関わることを強く望む傾向があった。大学生の入学前の学習経験のある者、ない者と高校生を比較した結果、「日本への留学」と「日本との親善・交流」を選択した割合が高校生、以前の学習経験がない者、経験がある者と徐々に上がり、日本語学習の経験が「日本へ留学する」「日本人と交流する」という目的に影響を与えたと考えられる。国際交流基金2012年度の調査結果(対象：海外の136の日本語教育機関、約399万人)において日本語学習の目的として選択の割合が高いのが「日本語そのものへの興味」(62.2%)、「日本語でのコミュニケーション」(55.5%)、「マンガ・アニメ・J-POP等が好きだから」(54%)であったが、それとは異なる結果である。カンボジアの社会・教育・経済的な問題が影響を与えている可能性がある。大学入学前に日本語学習経験のある者が68.0%であったが、受験準備のためという目的の者は非常に少なかった。大学入試科目との関係があると思われる。

### 3.4 中等教育における日本語教育の希望について

「もし、中等教育機関で日本語の科目があれば、勉強したかった・勉強したい」と回答した者は、大学生が95.37%、高校生が85.94%と高校における日本語教育の導入を強く希望している。

## 4. おわりに

事前に日本語を学習した大学生と1年間のみ学習した大学生の回答を分析した結果、学習経験により「日本への興味関心」や「学習目的」に違いがあり、勉強することで日本・日本語への興味や学習目的が明確になると言えそうである。さらに「将来の進路にかかわる日本語学習目的」をもつという特徴があった。また「日本語」とともに技術・伝統文化・ポップカルチャーに関心が高かった。高校の日本語教育のカリキュラム開発の際には、学習者の興味関心等に合わせ、シラバスに留学・就職に関わる項目に加え、「日本語」「食文化」「科学技術」「アニメ・マンガ等」を話題として取り上げたいと思う。また、高校生にとって身近で発達年齢にふさわしい話題、さらには関心を喚起したり視野を広げたりする話題を設定する。学習者が出会うであろう実際の使用場面や状況を想定し、コミュニケーション行動によって学習目標を定め、カンボジアの後期高等教育の日本語カリキュラムを開発したいと考えている。

### 【引用文献】

国際交流基金「日本語教育国・地域別情報」<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2013> (2017/2/2 参照)

国際交流基金「2012年度日本語教育機関調査結果概要」

[https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey\\_2012/2012\\_s\\_excerpt\\_j.pdf](https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey_2012/2012_s_excerpt_j.pdf) (2017/2/2 参照)

田中耕治他・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵(2011)「新しい時代の教育課程」有斐閣アルマ、pp.170-178

Ministry of Education, Youth and Sports. Policy for Curriculum Development 2005-2009. Phnom Penh, 2004